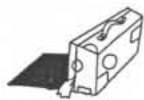


## CAFÉ



1971年、街にはまだ闘争の名残が残っていた。決して剥されまいとあちこちのブロック塀やコンクリートの電柱にべったりと貼り付けられたおびただしい数のビラをガリガリと何かで引っ掻きながら死んだ跡がある。そんな幾重ものビラの上に数人もの若い指名手配写真、ランチにより死亡したと思われる水膨れの水死体の写真が貼りつけられていた。

学校内の校舎や講堂などの割れたガラス窓にはなにかばあきらめかげんに少々の目やりが施してある。校内には空虚な目をして額にしわを寄せ、長い髪を肩まで落とし、埃にまみれた黒い学生服を面倒くさそうに履おった学生たちがウロウロしている。

そんな彼らが時折決まって顔をあわせる店があった。

夕暮れ時、ガタガタ走る路面電車に乗り込み、三つ四つ先の停車場で降りる。そろそろ開店の準備を始めようとしている飲み屋や、くたびれたキャバレーなどがいくつ

か並ぶ小さな町の片隅にある。そこはまるで廃屋のようなビルで、上のほうの階はやはりキャバレーかピンクサロンか何かそんなものである。

そのビルの階段を降りると店があった。

店の中に入ると、数秒間まるで何も見えないし、この怒涛のような音が一体何を意味しているのかは何も分からない。数秒後やっと目が闇に慣れて来ると少しづつぼんやりと見えてくる。耳も少し慣れ、そうかと曲名を判別する。

いつものように真っ黒いドレスを着た女主人とカウンター越しに目があい、彼女は黙って『空いてるよ』というように目でもいつもの場所に促してみせる。

中は、外側にも増していっそう廃墟のようである。狭い店の天井は黒く高い。狭い店の三分の一ぐらいが鉄骨で組まれたL字型の中二階になっている。その中二階の一番奥の席がいつもの場所である。いつものように鉄製のベンチに腰掛け、鉄の手摺りに寄掛かる冷たさが心地いい。赤や黒のホローのカップに薄いコーヒーマグが並々と注がれ運ばれてくるとやっと落ち着き、いつものようにカウンターの隅に掛けられたレコードジャケットに目を遣る。そうして10分

程経った頃、煙草に煙った店の全体が見渡せるようになる。よく見るとあちこちの隅に見慣れた顔がある。皆それぞれに気に入った場所に坐り込んで音に埋ずもれている。

地下室のコンクリートに直接土壁を塗った造りは妙に落ち着いた色をしているのだがいっそうかびくさく湿気ている。が気に掛けるものはない。壁にはとにかく落書きをして欲しいそとど誰かに聞いた。落書きが出来ない程壁が駄目になったら、店を開めるつもりだった。

夏場は、黒い天井から吊下げられた大型の冷房機が埃っぽい冷気をゴウゴウと音をたてて吹き出して寒いぐらいだったが、冬になると天井の高い部屋の真ん中に小さな石油ストーブがたった一つあるきりだった。ストーブにはいつも湯が沸いていてその横には女主人によく似た前足の先だけを白く残した真っ黒いマントを着たような猫が気持ちよさそうに寝ていた。

1973年秋、店は閉ざされた。女主人の夫が何かの事情で送検されたという噂だった。それが理由なのかどうかは誰も知らない。空虚な目をした学生達もいつの間にかどこかへ消えていなくなった。



★右記の文章は、雑誌ユリイカに掲載された新宿風月堂支配人山口守氏の回想手記をもとに構成いたしました。

## CAFÉ

昭和21年、終戦の翌年焼け跡となった新宿に風月堂は開店した。まだ夕開せまる裏路地でG Iや黒人兵から洋モクを買う男達や、チョコレートや缶詰を買って腕を組む街の女達が見掛けられた頃である。新宿の焼け跡を買ったオーナーの横山五郎さんは物資の乏しい中、お兄さんの工場からケーキを調達し、最初に出したコーヒーマグは、進駐軍の使い捨てたコーヒーマグを煮出した物だったという。夫妻で七輪を扇いで汁粉も作り、夏はアイスキャンデーも出した。何も無い時代に人々はそんなものでも飲みながらでも充分くつろいで話をする

ことができたのだろう。やがて闇のM・J・Bやスチボンなどの缶入コーヒーマグが手に入り、横山さんが学生時代に蒐めたSPレコードを手廻しの蓄音機でかける。名曲喫茶草分けの誕生である。

昭和24年夏、大規模な改装を施す。風月堂のベル・エポックの始まりである。天井にはシャンデリアが輝き、白い円柱、浮き彫りのある漆喰の壁になった。客席90を擁し、当時を知る人はギリシャ風とも、ロココ調とも印象は様々である。人によってはゴリキーのどん底の宿に過ぎんなどと言う人もあるが、なるほど集まってくる人の身なり、風体は『どん底』であった。その頃の横山さんは濃紺のG I帽を被り自らカウンターで忙しく立ち働いて、疲れてホールに出てくる時ははらりとした英国製の背広を着込み後手を組み、いんぎんでくことなくキザでどうにもとつきにくい親父だったという。この横山さんの才覚により店構えが出来れば選び抜かれたウエイトレスを、SPレコードをLPレコードに、白壁には梅原龍三郎、須田国太郎の絵を、また昭和27年には風月堂第一回コンサート

を催した。マスターの「カヴァリア・ルスチーナ」であった。窓に厚いカーテンを降ろし、シャンデリアの灯を消し、客席にキャンドルを灯すとあたかも教会にも似た静かで荘厳な雰囲気が出された。コンサートは大変な反響を呼んだ。

昭和30年、二度目の大規模な改装をする。客席は130になった。新進建築家増沢氏による当時としては前衛的ともいえる巨大な空間を持つ建物だった。

若者たちの文化的広場を作り創造的エネルギーを燃やすものでなければ永続的な媒体にはなり得ないと考えた横山さんは膨大なレコード枚数を保有し、巨大な壁からは自分のコレクションを引っ込めて前衛絵画の個展を企画した。こうして風月堂の黄金時代は築かれた。しかし昭和38年暮の多田美波の作品展をピークに前衛絵画は徐々に退潮していき、風月堂の黄金時代も静かに幕を降ろされた。

昭和39年、東京オリンピックの頃から高度成長と共に加速度的に世の中は変貌して行くようになった。最初は外人と政治であった。著名なガイドブックにも紹介され、その本を片手に入ってくる外人の数はかなりのものだった。呼びハイカーやヒッピー、セクト化し徐々に過激な様相を呈し始めていた全学連、アングラ俳優風、フーテン、シンナー中毒……

昭和47年になると風月堂の向隣は7階建のビルになった。新宿の地価は高騰し平家や二階建ての商売では段々難しくなり新宿の商売も大きな変りめを向かした。今迄のような人間関係ではなく金が基調になった。何か街の体温が下がってきた感じだった。風月堂も高いビルの中、何とも見すばらしくなった。大変な努力で続いていた絵の個展もやめなければならなくなった。戦後あれほど画壇を賑がした前衛絵画もすっかり下火になっていた。店はじり貧の予感でありこうなると閉店への道は早かった。その年の暮、横山さんは、早ければ来年の春ごろ閉店すると言いつつ渡した。惜しまれるうちに、これ以上見すばらしくならないうちにという気持ちだった

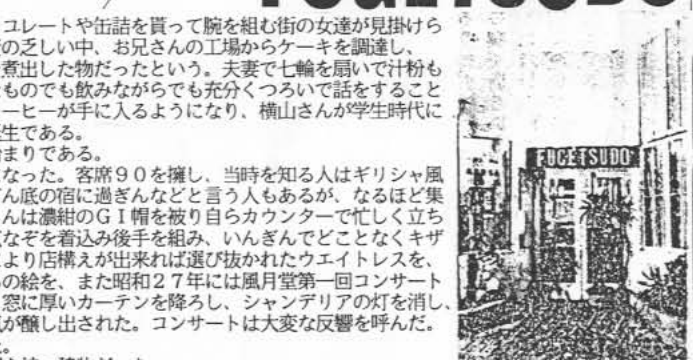
結局、閉店は八月三十一日と決まり、店頭には閉店の日付を知らせる案内が貼り出された。そうして八月三十一日の閉店の日があった。何年も来なかったお客さんが何人も顔を出してくれた。店は溢れるほど一杯で、夜になると昔いたボーイさんが何人も来て手伝ってくれた。横山さんは淡々としているように見えたが、奥さんはお客さんから優しい声を掛けられるた

びに目に熱いものを浮かべていた。閉店の時間が来て客は誰一人動こうとしない。いつもの閉店の時にかかる復活祭ミサの鐘を打ち鳴らしても誰も立とうとしない。とうとう私が「もうかたづけなければなりません。長い間、本当に有り難うございました。」と頭をさげて廻らねばならなかった。「あなたも元気でね、さようなら」といわれど私の胸にもぐっとこみ上げるものがあった。やっと片付けて、横山さんを中心に皆でビールで乾杯した。やめたボーイさんも加わった。その間も店の前には大勢のお客さんが立ちつくしていつまでも風月堂の最後を見守っているのだった。

「さあ……」と横山さんの声で立ち上がった。灯がひとつずつ消された。それが風月堂の終りだった。



## FUGETSUDO



昭和21年、終戦の翌年焼け跡となった新宿に風月堂は開店した。まだ夕開せまる裏路地でG Iや黒人兵から洋モクを買う男達や、チョコレートや缶詰を買って腕を組む街の女達が見掛けられた頃である。新宿の焼け跡を買ったオーナーの横山五郎さんは物資の乏しい中、お兄さんの工場からケーキを調達し、最初に出したコーヒーマグは、進駐軍の使い捨てたコーヒーマグを煮出した物だったという。夫妻で七輪を扇いで汁粉も作り、夏はアイスキャンデーも出した。何も無い時代に人々はそんなものでも飲みながらでも充分くつろいで話をする